新社長

日本精鉱 植田 憲高氏

ノウハウ共有、生産性向上

アンチモンと金属粉事業の連携強化

6日29日に日本精鉱社長に就任。「2大柱であるアンチモンと金属粉末の事業連携、営業と生産の部門連携を進め、生産性向上を目指す」と意気込む。

プラスチック用難燃助剤や触媒、減摩材などとして使われるアンチモン製品と、電子部品や冶金用である金属粉末は、異なるマーケットを持つものの双方とも粉末状の製品という共通点を持つ。特に金属粉末事業においては製造過程で目的物の回収に課題がある。そこで、アンチモン事業のノウハウを生かして課題解決を現在図っている。

また、十数ミクロン単位が主力の金属粉において、電子機器の高性能化、小型化などに伴い、今後1ミクロン以下の需要が増えると見る。一方、三酸化アンチモンは0・5ミクロンがメインで、粉体の微細化においても事業連携による効果が期待できるとする。

「こういった取り組みを通じて生産性を向上するほか、さまざまな施策により従業員の働きやすさも改善していきたい」。

連携を強めるのは事業単位だけではない。営業部門と生産部門のコミュニケーションを密にし、顧客への提案力強化につなげるという。例えば、これまで顧客ごとにきめ細かく要求に応じてきたために、生産品の種類が膨れ上がり、生産効率や安定供給の面で課題が出ていた。

「ただ、仮に各顧客が異なる仕様を求めていても、実は同じで構わないというケースが多々ある」。そこで昨年から試験的に、一部の顧客に仕様変更提案を行い、生産品目を最適化する取り組みを実施。顧客から直接求められた仕様とは異なるものの、提案した仕様による受注で供給の安定性と納期対応が改善。結果、顧客も満足してくれたという。今後、顧客への提案を通じて顧客満足度向上を高めていくとともに、製品仕様の共通化を進めることで生産設備の最適化も図る方針だ。

「営業と生産は表裏一体でなければ」と部門連携の重要性を強調するのは、営業畑27年、主力工場の中瀬製錬所（兵庫県養父市）所長の経験を持つ同氏だからこそ。「社員が迷わないよう、トップとして判断がぶれないように努めたい」。休日はもっぱら映画で息抜き。最近はサブスクリプションサービスで見ることが多いが「コロナが落ち着いたら映画館に行きたい」。

（山口　大智）

略歴

植田　憲高氏（うえだ・のりたか）大学卒業後、1987年日本精鉱入社。2016年日鉛精礦（上海）総経理、19年中瀬製錬所所長、22年6月より現職。